



Title	日本統治下台湾における能楽
Author(s)	王, 冬蘭
Citation	JSPS科研費「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」23K00117 研究成果報告書. 2026, p. 115-131
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

6 日本統治下台湾における能楽

王冬蘭

一、はじめに

日本植民地統治時代の台湾において、能楽は日本人社会で展開された。例えば、能楽上演が行われ、能舞台も作られ、能楽社中も数多く組織されて、絶えず稽古が行われていた。また、『能海』という能楽雑誌も現地で刊行された。

台湾における能楽についての研究はそれほど多くはないが、以下のような論考がある。関屋俊彦「雑誌『能海』の行方」(二〇〇七)や竹内淳は、台湾で刊行された『能海』二冊の発見経緯や雑誌の構成について紹介した(二〇〇七)⁽¹⁾。齋藤裕一「台湾における能楽の初演について」(二〇〇九)は、明治三十八年(一九〇五)の台湾における最初の能楽公演について詳述した⁽²⁾。

また筆者は、これまで以下のような四本の論考を発表し、主に能舞台と能楽師のふたつの視点から台湾における能楽の諸相を明らかにしてきた。

王冬蘭「日本統治下台湾における「能楽第一人者」小川尚義について」(二〇一九)⁽³⁾

王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」(二〇一九)⁽⁴⁾

王冬蘭「桂六平と能楽雑誌『能海』」(二〇二〇)⁽⁵⁾

王冬蘭「日治時期台北大村武能舞台研究」(二〇二一) (6)

ここでは、これらの既発表論文と本科研で開催された研究会、および芸能史研究会例会(二〇二〇年十月)で発表した口頭発表の内容に基づき、台湾能楽の展開に大きな役割を果たした各流の主な指導者の活動地域、時期、各流の主な社中などから、日本植民地時代台湾の能楽の諸相を概説する。

なお、台湾における能楽の展開は、観世流、喜多流、宝生流という三流があったが、金春流、金剛流の活動はほとんどなかった。指導者の移動や各地の能楽展開状況等により、台湾における能楽を前半期と後半期を分けて考察を進める。なお引用する『台湾日日新報』記事は、読みやすさの便宜をはかるため、新字体とし句読点を補っている。

二、前半期における主な指導者と社中(一八九〇年代後半)

(1) 観世流(台北)

『台湾日日新報』明治四一年(一九〇八)七月一五日「台北の謡曲界」には以下のようにある。

観世流は嘗て杉原謙氏が頻りに吹聴せしが多くは浪人的集合団にて鼻突合ひに過ぎざりし。然るに喜多流の桂氏が渡台後、澤井氏渡台し観世流の発展に力を尽したる結果、観諷会なるものを起したるが未だ一般を風靡とするの勢力なく杉原氏時代に比して稍活気を帯びたる計りなりしが、此澤井氏も亦病気の為、去十日郷里へ帰り、再び同派は師匠を失ひたり。されど観世流には古くより温聲会なる会合あり。高雄氏これが牛耳を執り官民の浪人天狗連素養ある人多く概して喜多流よりも巧者勝ちなれど統一するものなければ

観世の流れを汲みながらも仕舞などは喜多流の八戸氏が門に教を乞ふものあり斯くの如き状態なれば、今後同派に適當の師匠を有せざる限りは自然喜多流に赴くもの多きを加ふるに到らんか。(以下略)

観世流の謡曲指導者が現れたのは、他の植民地にさきがけて台湾が一足先だった。例えば、杉原謙という人物は早い時期に謡曲指導者として活動を行った。杉原謙の謡曲師範した時期は「杉原氏時代」と言われる。恐らくこの「杉原氏時代」とは、台湾における謡曲師範が指導した社中が活動を開始した時期である。もともと、杉原謙は台湾で謡曲指導の先手を打ち、愛好者の「集合団」が出来たが、謡曲社中として稽古の質を高めることが出来なかつたようだ。

杉原謙の後、明治三六年（一九〇三）に観世流の澤井政秀が渡台して、「観諷会」という社中を起し、「杉原氏時代に比して稍活気を帯びたる」と評価された。澤井氏は、明治三八年（一九〇五）七月に観世流謡曲同好者を団結して新起街一丁目八十七番戸に設置された「観世倶楽部」の常任幹事となり、志望者の指南をする

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
	温声会	台北	1900 前	
杉原謙		台北	1899 ? ~ 1900、1901 頃	観世清之に師事ワキ方春藤流の鍋木祚胤に入門
澤井政秀	観諷会	台北	1903 ~ 1908	
田中基次	観世倶楽部	台北	1909 秋 ~ 1912 秋	自称「五軒家素謡宗家」
笠原健	晴雪会	台北	1909 前 ~	宗家から免許
清水	鉄道部内の社中	台北	~	梅若派
加藤秀明		台南	1907 前	(名古屋) 観世流松浦に師事
鈴木重義	高砂観世会	台南	1909 前 ~	

表 1 台湾における観世流の指導者・社中一覧 (前半期)

こととなった（『台湾日日新報』明治三八年（一九〇五）七月二十六日「観世倶楽部」）。しかし、病気の為、明治四一年（一九〇八）七月ごろ日本に帰り、「再び同派は師匠を失ひたり」という状態になった（前掲『台湾日日新報』明治四一年（一九〇八）七月十五日「台北の謡曲界」）。

その後、田中基次が観世流謡曲師範として招聘され、明治四二年（一九〇九）秋に台北へ渡り、明治四五年（一九一〇）秋まで三年間台湾に滞在した。田中基次は、京都における観世流謡曲素謡の大家であり、かつて「五軒家素謡宗家」と自称、明治三〇年代から、京都で社中を主宰し、活躍した人物である。台北に「観世倶楽部」が出来たため、田中基次氏を招聘したようである（『台湾日日新報』「観世倶楽部と師匠」明治四二年（一九〇九）十一月一日「田中基次氏披露會」、「同」明治四二年（一九〇九）十一月二日「観世流の素謡」）。観世倶楽部は喜謡倶楽部に対抗するような趣旨で成立されたものである。彼が指導した観世倶楽部の会員は数十名になった時期もあった。

笠原健は日本銀行台湾銀行を仕事としていたが、宗家から免許を得て、「晴雪会」という社中を主宰し、指導した。『台湾日日新報』大正三年（一九一四）四月八日には、以下のような記事がある。

観世謡曲晴雪会 台北の観世流謡曲界に知られたる笠原健氏は昨夏上京して観世宗家に就き修業し、今回指南免許状を得て再び渡台し、府前街四丁目二十二番戸に於て晴雪會の門標を掲げて普ねく同好の士に謡曲を教授するに至り、已に十数名の門弟ありと。

笠原健の指導は「節の細かい叮嚀な教へ方」であったそうで、「晴雪会」の弟子は、三十名前後の時期もあった。

現存の能楽雑誌『能海』（第一年第一号）には「晴雪会」の印章がおされており（図1）、「晴雪会」の活躍を物語っている。

以上のほかに清水という苗字の梅若派の謡曲師範が鉄道部における社中を指導したが、長く続かなかつた。

（2）観世流（台南）

台南の謡曲界については「台南の謡曲界」「台湾日日新報」明治四〇年（一九〇七）七月二五日に次のようにある。

台南では観世一点張りで、宝生と喜多は殆ど姿を見せない縦令。あつた処でこの流派だと取立て云ふべき程の者は無論ないから金剛とか金春とかに至っては皆無といつてもよい。扱て観世の内で頭角を現はして居るの

は、櫻庭氏（法院長）で氏は名古屋奉職時代に彼の松浦九郎右衛門

（俳名、羽洲）に就いて正式の稽古を遂げた一人である。松浦と云へ

ば先代観世（清孝）の五天王と云はれた梅若実（東京）観世鍔之丞

（同上）同清之（同上）生一佐兵衛（大阪）などの一人で二百番位

は無本で遣り通す程の先生だから、従て其稽古を受けた櫻庭も地方は

可成に稽古が積んで居るらしい。併し仕舞や能は得意ではあるまい。

氏に亞げる謡ひ手は橋仔頭製糖会社の日比氏で、是は大坂大西閑斎

の弟子として銘を打つたゞけあつて南部ではオーソリティーの一人と数



図1 『能海』第一年第一号表紙、大正4年（1915）6月1日

へられる。されど同じ観世でも東国と西国とは自ら謡振りが異なるので東仕立の人々とは一寸間が合はないらしい。台南でも一兩年前までは観世に高雄（専売局の）氏あり。寶生に山形（修人）松井（栄莖）等の諸氏あつて折々謡曲会を開かれたがあつたが、今では此催しも絶体に頼れて了まつたが、先達から加藤秀明と云ふ斯道の師範が来て、今では数名の門弟も出来稽古を始める事となつた。氏は岐阜の生れで仕込みは名古屋観世松浦門の出で櫻庭氏とは同門の人である。氏は仕舞もやれば又能もやる。年齢はたしか二十五六の青年だが、咽はたしかなものである。此外に口羽、竹内など云ふ面々もあるが至て初歩の方で今となつては稽古すると云ふよりも寧ろ稽古して貰うと云ふ側であらう。

台南には明治四〇年（一九〇七）前、加藤秀明という仕舞も能もできる指導者がいたが、長く続かなかつたうである。その代わり、鈴木重義の指導した「高砂観世会」は存在感が強かつた。鈴木重義がいつ台南に渡つたかについてまだ確認できていないが、明治四二年（一九〇九）の可能性が高いと考えられる。『能海』第一年第一号、一九一五年六月一日（四五―四八頁）によれば、鈴木重義の明治四二年十月の社中として、以下の名簿が掲載されている。

●台南に於ける観世流免状下附氏名

台南 鈴木重義

左記の内退会、転住又は黄泉の客となりし惜しむべき人もあるが別に省かず年月順により記載す

（イロハ順）

明治四十二年十月

一、直第 九番習謠

一、同 上 林 久三君

一、同 上 大西 道生君

一、同 上 高橋 常吉君

一、同 上 竹本 桃吉君

一、同 上 津國 百松君

一、同 上 黒田菊太郎君

一、同 上 朽木 義春君

一、同 上 矢野 進君

一、同 上 古山 聖君

一、同 上 幕内菊太郎君

一、同 上 越川半五郎君

一、同 上 松本 猪熊君

一、同 上 朝倉政次郎君

(以下次第不同)

一、直第 九番習謠

一、同 上 岸 隆欽君

一、同 上 半田徳之助君

一、同 上 朽木 義重君

指導者	社中名	所在地	稽古場所	活動時期	備考
桂六平	一音会	台北	会員の家	1902 ～ 1915	一度喜多六平太方に寄寓して学び
	喜謡倶楽部	台北	会員の家 喜謡倶楽部稽古場	1906 ～ 1915	
八戸岩三郎	喜謡倶楽部	台北	会員の家 喜謡倶楽部稽古場	1906 ～ 1915	喜多六平太門下
坂安彌	台北喜謡倶楽部 喜多流地拍子研究会	台北		1915年頃?	

表2 台湾(台北)における喜多流の指導者・社中一覧(前半期)

一、同	上	鳥居	勝治君
一、同	上	尾形	瀧郎君
一、同	上	古田	力松君
一、同	上	永野	耕夫君
一、同	上	柳下	甚蔵君
一、同	上	吉松	秀彦君
一、同	上	小松	繁吉君
一、同	上	竹内壽衛馬君	
一、同	上	木本	梅吉君

(以下略)

台北における観世流の指導者は変動が大きく、長く指導した者が少なかったが、台南は観世流「一点張り」と言われ、観世流の存在感が強かった。(表1参照)

(3) 喜多流(台北)

喜多流の場合は、主な指導者の活動展開は観世流より遅かったが、長く継続的に指導した者がいた事が特徴である。『台湾日日新報』明治四二年(一九〇九)三月三十一日「台北の「会」喜謠倶楽部」によると、

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
笠原健	晴雪会	台北		1925年の能楽上演に参加
伊藤六三	台北、屏東、高雄市高等女子学校（倶楽部）、蘆葉会、三井観世会、台鉄観世会、高雄観世会、郵船観世会、海軍羽衣会、清香会（婦人会）、扇友会（仕舞）	高雄（台北など出張指導）	1914～	山階徳次郎門下自宅に能舞台あり
弘誓較一	鉄道同好会、九臯会、重陽会	台北（基隆、台中など出張指導）	1928～	観世喜之門下
相澤喜三郎	観世会支部（台北）観世会支部（新竹支部）	台北（台中など出張指導）	1929年10月～	
鈴木重義	高砂観世会	台南		

表3 台湾における観世流の指導者・社中一覧（後半期）

台北謡曲界の団体中最も優勢なるは西門外街一丁目たいほくくわいのかいだんたいちゅうがふちの喜謡倶楽部なり。八戸やちほ、桂かつらの二師匠が専ら教授の任にんに当り、荒井あらい・金子かねこ・小松こまつ・木下きのした・柵瀬さくせ・松村まつむら・松本まつもと・安田やすだ・長野ながの・高橋たかはし（親しん）・村田むらた・一の瀬いちのせ・濱口はまぐち・高石たかいし・土屋つちや・松本まつもと（眞しん）等の官民紳士を網羅し、毎月一回月例会を開き、尚他流合同の謡曲会をも時々催すなり。

最初の指導者である桂六平は明治三五年（一九〇二）に台湾に渡り、兼業として「一音会」を組織、指導したが、明治三七年（一九〇四）に総督府の本職を辞職し、「謡曲指南専門」になった。一度東京の家元喜多六平太方に寄寓して学び、明治三六年（一九〇六）に台北に戻り、後に、八戸岩三郎と共に「喜謡倶楽部」を主宰、指導した。台湾喜多流元老でもあり、台湾で発行された能楽雑誌『能海』の発行者、編集者でもあり、台湾能楽の「先駆者」だと言われた。「喜謡倶楽部」は「台北謡曲界の団体中最も優勢なる」といわれた社中だった。

続く、八戸岩三郎は、喜多六平太門下、台湾喜多流元老、喜謡倶楽部等指導、台湾能謡界の「先駆者」だと言われた。

三、後半期における主な指導者（一九一〇年代後半～一九四五）

（1）観世流

伊藤六三（高雄）は、『能楽年鑑』（昭和一〇年（一九三四）版）によれば、明治一八年四月二〇日生まれ。故山階徳次郎門下で、「稽古は台北州四ヶ所、台南州一ヶ所、高雄洲九ヶ所、自宅月四回、特別稽古八回、其他出稽古」にあたり、自宅は高雄市壽町九であった。大正三年（一九一四）台糖（台湾製糖株式会社）の観世流の松諷会に招かれ台湾に渡った。それから三〇年間前後高雄に滞在し、高雄を拠点にして、台北などまで多数の都市で謡曲指導を行い、伊藤六三が指導した名前が分かった社中は「蘆葉会」等十数個がある。また屏東市、高雄市、台北第一高等女子学校の倶楽部などの指導も行った。大正一三年（一九二四）に自宅に能舞台を造った。

弘誓較一は、『能楽年鑑』昭和一〇年版、（一九三四）によれば、明治一六年七月二八日生まれ。観世喜之門下で、「台湾九皇会を指導。稽古は自宅にて一週二回。月曜木曜」で自宅住所は、台北市大和町三ノ一であった。いつ台北に渡ったかについてまだ確認することが出来ないが、鉄道部同好会は「昭和三年より今の弘誓先生を招聘すること、なり以降、謡曲熱も盛んとなりその謡振りも堅實味を發揮して来た。現在同好会謡

指導者	社中名	所在地	活動時期	備考
大村武	喜多会、喜多会 婦人会、台北第 一高等女子学校、 台北第二高等女 子学校（倶楽部）	台北	1922～1945 (台中等出張指導)	喜多六平太門下 自宅に正式能舞台あり

表4 台湾における喜多流の指導者・社中一覧（後半期）



図2 「同好会謡曲秋季大会」『台湾鉄道』
昭和6年（1931）12月より



図3 大村武能舞台、立っている役者は
大村武である

曲部の会員は殆ど四十名を超えんとし」（『台湾鉄道』「同好会謡曲部春季大会記」昭和七年六月一日、三七～四〇頁）、彼の指導した鉄道部同好会の活動写真がよく報道された。また、彼が九臯会を主宰、指導した。九臯会は当時「昭和時期台湾觀世流の代表的な社中」と言われた。当時九臯会の稽古場所は彼の台北における自宅だった。台北のほかに基隆、台中等出張指導も行った。また、弘誓較一の謡曲「鞍馬天狗」が、昭和一二年（一九三七）八月三十一夜に台北から放送されたことから（『台湾日日新報』昭和一二年（一九三七）四月五日）、この時まだ台北にいたことが分かる。（表3、図2参照）

（2）喜多流

大村武は一〇代から台北で喜多流の謡曲指導者である八戸岩三郎について能楽の稽古を開始したが、一七歳の時に東京の喜多六平太に入門し、八年間習い、

大正十一年（一九二二）二十五歳の頃台湾に戻り、台北喜多会、同婦人会等を指導、台中等も出張指導した。大正十三年（一九二四）に、台北の自宅に正式な能舞台を設けた。大村武については、拙稿「日治時期台北大村武能舞台研究」（二〇二二）にて詳しく考察した。なお、この自宅跡は、現在「大村武」という名の居酒屋となっており観光名所となっている。台北喜多会

は、大村武が以前の桂六平、八戸岩三郎が指導した喜謡倶楽部と三雲会を喜多会に統合した会である。(図3参照)

四、著名人における能楽指導者

『台湾日日新報』明治四二年(一九〇九年四月二七日)「台北の謡曲界(十)」には、宝生流について「紫雲会」という団体があり、台北に会員三〇余名があったという。また他流と違い、官吏の出が多かったという。

また、観世流・喜多流・宝生流の各流派には、能楽の専門指導者ではないが、能楽指南も行う著名人がいた。まず、下掛宝生流の小川尚義である。

小川尚義氏、何といつても斯道の大家、全島謡曲界に於ては先づ御師匠株は別として氏の右に出づるものはあるまいとは公評である。特に偉い事は謡曲全般に涉つて通曉せられる事と繁忙中後進の誘液指導に熱心なる事で流石の評者も悪口をいふ隙間がないが、由来褒めちぎる事の出来ぬ筆法一ツ難をいふなら前歯が如何かなつて居るのか「サ」の音と「タ」の音が頼

名前	著名分野	能楽における流派	能楽指導分野	在台区間	備考
小川尚義	言語学者 言語研究	下掛宝生流 葛野流大鼓 の達人	謡曲、囃子を指導	1896～ 1936	台湾の謡曲界の「第一人者」と言われた。
石川欽一郎	画家 西洋画	観世流	謡曲指導	1907～ 1916 1924～ 1932	
武部竹令 (本名： 竹次郎)	画家 東洋画	喜多流 狂言鶯流	謡曲指導	～1940年	

表5 著名人の能楽指導者

時間	場所	会名	上演曲名	掲示新聞名
1913年 10月27日	台北 台湾神社	台湾神社大祭	禰宜山伏	「台日」10月25日 『大正の能楽』
1913年 10月31日	台北	天長節奉祝能楽	早漆	「台日」10月31日
1914年 6月9日	台北	能狂言会		
1916年 9月24日	台北 圓山臨濟寺	伊藤氏追悼能楽	間（能八島）	「台日」9月23日
1919年 10月27日	台北 新公園	祭典余興能楽	昆布買	「台日」10月24日
1924年 11月	台北 喜多能舞台	鷺流狂言会発会		「台日」11月15日
1925年 6月10日	台北 本願寺	鷺流狂言大会	素襖落など	「台日」6月9日
1925年 11月15日	台北 喜多能舞台	鷺流狂言大会 (狂言秋季大会)	太刀奪、文荷、 骨皮	「台日」11月11日
1927年 4月17日	台北 喜多能舞台	鷺流狂言大会 (狂言春季大会)		「台日」4月16日
1929年 4月30日	台北 建功神社武 徳殿	三流大合同奉納 能楽	不毒、禰宜山 伏	「台日」11月11日
1931年 12月6日		能狂言会		

表6 永久春水の上演、活動記事（「台日」=『台湾日々新報』）

りなく「候ふ」が「つを
うろう」に聞えるのと無
暗に押へる気味があるの
で苦しそうだ。

と、紹介される小川尚義は明治二九年（一八九六）一〇月に台北に渡り、台湾総督府学務部に勤務、後に台北帝大文学部政学部教授になった人物で、著名な言語学者である。下掛宝生流、葛野流の大鼓の達人でもあった。「小川君は台湾各流の謡曲家を通じての第一人者であるのみならず、東京へ出て同輩では有数の豪傑である」（『台湾の謡曲界』『新台湾』大正三年（一九一四）

一二月一六日）と言われる。

石川欽一郎は著名な「画伯」であり、台湾にいる間に、観世流の行事に参加するのみならず、指導者としても活躍した。台湾の能楽専門雑誌『能海』の第一年第一号に、「能海」の発刊を祝して」の文章を寄せている。

小川氏は下掛宝生流、石川氏の観世流と異なる流派であるが、『能海』第二年第三号「台湾能楽界▽台北△」（大正五年（一九一六）三月一〇日）に、

▽喜多流小会 二月十三日撫台街高石忠慥氏宅に於て、同流有志及び小川尚義氏、石川欽一郎氏の両氏等集
会素謡及囃子等ありたる由なり。

とあるように、喜多流の催しに呼ばれることもあった。

武部竹令は画家であるが、喜多流能楽指導者でもある。野々村戒三『能の今昔』（木耳社、一九六七年）では、京都の堀池社中に「稀に見えた」画家で、「竹内家の人だとかあるいはその縁者であるとか言われていた」（九三、一四二頁）などと記されている。謡曲を巡回教授したこともある上に、台湾で「竹令能画会」を主宰したようである。昭和二年（一九二七）の第一回台湾美術展覧会に「翁」「狸々」という二枚（一对）の能画が展覧、能画「鉢木」が翌年の台湾美術展覧会に展覧された（7）。

五、台湾における鷺流狂言の伝承

鷺流狂言は、明治中期には中央の能楽界から姿を消し、佐賀県佐渡などに残り、山口県山口市に伝えている人

がある事は周知のことである。しかし、日本統治下台湾には、鷺流狂言を伝えていた人がおり、名前は永久春水である。『台湾日々新報』などの記事によれば、彼が一九一〇年代から一九三〇年代の間に鷺流狂言を上演、「鷺流狂言会」を組織、「鷺流狂言大会」の開催を行った。鷺流狂言会のメンバーが数人もいり、前述の武部竹令もメンバーの一人である。鷺流狂言の台湾で伝承されたことは鷺流狂言の伝承史にも加えるべきことだと考えられる。

『台湾日日新報』（大正一三年（一九二四）一月一五日）に「鷺流狂言会発会」記事があり、

今回、鷺流狂言師永久春水老の指導になれる同会は、十五日午後正六時より、西門會事務所に於て愈々發会する事となつた。一般の觀覽を希望すと（但し無料）番組左の如し。

末広（北村寒月、永久春水、白石淡水）、神鳴（大村岳水、白石淡水）、因幡堂（永久春水、北村寒月）清水（武部竹令、永久春水）蟹山伏（新田穰一、永久春水、白石淡水）瓜盗人（菅卜石、北村寒月）佐渡狐（藤田天教、菅卜石、永久春水）小舞、仕舞、祝言（福神小舞）

第二回は翌年六月十日午後六時より新起町本願寺樹心館に於て開催され、「觀覽券は新起町一丁目新田東陽堂にて発売す」にあり、有料で開催された（『台湾日日新報』大正一四年（一九二五）六月九日）。同『台湾日日新報』記事に、掲載された予定番組は以下の通りである。

素襖落（永久春水、北村寒月、大村淡水）いろは（新田穰一、北村寒月）痺れ（仁田北水、永久春水）寝音

曲（武部竹令、北村寒月）芥川（藤田天教、菅卜石）悪太郎（北村寒月、世良南門、永久春水）仁王（西村茶園、北村寒月、永久春水）舞囃子、仕舞、小舞数番。

『台湾日日新報』大正一四年（一九二五）一月一日の第三回「鷺流狂言大会」記事は以下のようである。

来る十五日（日曜日）午後一時より台北市築地町三丁目喜多舞台に於て鷺流狂言秋季大会開催、其番組左の如し。

鼻取相撲（北村寒月、柳井南聲、三木勝水）太刀奪（谷口波鼓、永久春水、西村茶園）、栗焼（武部竹令、北村寒月）文荷（永久春水、谷口波鼓、橋本南水）骨皮（西村茶園、永久春水、谷口波鼓、三木勝水、柳井南聲）

仕舞 竹生島（世良保次郎）田村（三木勝水）、湯谷（大村武）、殺生石（武部竹令）

『台湾日日新報』大正一六年（一九二七）四月一六日の報道によると、大正一六年（一九二七）四月一七日も喜多舞台で「鷺流狂言大会」が開催された。（表6参照）

六、まとめ

三流派の專業指導者の所在地により、流派の態勢が違う傾向がある。南部、中部は觀世流が優勢だったが、北部は喜多流の存在感が強かった。宝生流には專業指導者がいなかったようであるが、社中が存在した。

三派、すなわち観世流、喜多流、宝生流三流が頻繁に連合して行事を行った。たとえば、台湾現地の人々上演した能楽の上演会は、すべて三流派連合して行った。これは一つの流派だけでは役を揃えることができなかったため、これは植民地における能謡界の共通点であった。

注

- (1) 関屋俊彦「雑誌『能海』の行方」『関西大学視聴覚教育』三〇、二〇〇七年三月、六三～六五頁。なお、この関屋論考は、二〇〇五年十二月に関西の能楽研究会「六麓会例会」にて、口頭発表した内容に基づく。また、竹内淳は、二〇〇七年十二月に六麓会例会での口頭発表「『雑誌『能海』と小川尚義』で『能海』創刊号が熊本県立図書館に保存されていることを指摘している。
- (2) 齋藤裕一「台湾における能楽の初演について」日中人文社会科学学会編『知性と創造（日中学者の思考）』（二〇一〇年、七七～八四頁。二〇〇九年五月二二日「語言・文学・文化交流と国際交流」国際検討会（会場、台湾新竹市）での口頭報告「台湾における能楽の初演（一九〇五年）について」に基づく。
- (3) 王冬蘭「日本統治下台湾における「能楽第一人者」小川尚義について」『帝塚山経済・経営論集』第二七卷、二〇一九年三月、一一七～一二二頁。
- (4) 王冬蘭「日本統治下台湾における能舞台」『藝能史研究』第一二七号、二〇一九年十月、一二一～三八頁。
- (5) 王冬蘭「桂六平と能楽雑誌『能海』」『演劇学論叢』第十九号、二〇二〇年三月、一～十四頁。
- (6) 王冬蘭「日治時期台北大村武能舞台研究」『戲劇学刊』第三四期、二〇二二年七月三五～五九頁。
- (7) 「猩々」「翁」財団法人陳澄波文化基金会「ホームページ」<https://caifuten.com/>（最終閲覧二〇二五年一月九日、識別号CA01_009_P004_149_e-t1「三輪」「日本人物」「国立歴史博物館」「典藏資料検索」による